

△「宇宙紀の花・三島由紀夫」について▽

格納したVol.1「未来の三島由紀夫」と、新規作成したVol.2「宇宙紀の花・三島由紀夫」の二つの原稿です。新しい「宇宙紀の花：」からご覧になっていただけたらと思っています。どちらも画とタイトル文字をざっと眺めるだけでも何かを感じていただけるようにはできていますので。

* 三島さんが市ヶ谷のバルコニーで「日本を守るとはなんだっ！」と叫んでも誰もわかる人はいない。実は宇宙紀に由来する深すぎる主題。

三島由紀夫さんは「花」と「みやび」で闇に対峙する運命があつた。その形而上学は彼が学習院中等科十五歳くらいのときに不思議にもすでに持っていた、空虚と△非在▽の形而上学。

それが三島由紀夫の和歌原理主義であり、日本人がほんとうに目指すべき精神的な計画書のようなものだと思っています。

ともあれ、三島さんのこれらの射程まで敷衍した書は存在せず現在の日本が政治情勢的に「再生」を果たした時、ではそれでは、日本人は、内的な精神進化としては「何を指せばいいのか？」の指針。つまり、一言でいへば、非在の「花「miyabi」」によって「世界の外」を目指す、と言うグノーシスの精髓かと。

その意味で「宇宙紀の花」は、王朝文学や日本精神のみやび自体を形而上学的に形象化することを目指しています。

そのことにより、新しいニンゲンの形式を黙示し、少数の志ある日本人の神人化への進化を意志するものであります。

2019 / 11.25

小池憲治 プロフィール

1951年山梨県 現・北杜市に生まれる

<白洲信哉氏との協同作業>

グラフィックデザイナーとしてのビジネスのかたわら、

小林秀雄、白洲次郎・白洲正子夫妻のあいだの

お孫さんである白洲信哉氏と二人で日本精神史を、新たなデザインで現代に再構築するべく協同作業を試みてきた。

■小林秀雄生誕百年記念展 MIHO MUSEUM 他・全国巡回展

■白洲正子生誕百年記念展 MIHO MUSEUM 他・全国巡回展

■青山二郎生誕百年記念展 MIHO MUSEUM 他・全国巡回展

■日本最大規模の”根来展__朱漆・中世に咲いた華”展 MIHO MUSEUM

その他白洲次郎など、一連のDesignを統括・担当。

<日本美術誌「目の眼」表紙デザインを5年間連載>

日本において最も歴史伝統のある美術月刊誌「目の眼」が2013年に白洲信哉氏を編集長に招聘し新装発刊。

白洲氏に表紙デザインを任せられ、彼と5年間担当。

日本の美術と精神のあらゆるアスペクトの再構築を目指し二人で協同。

(2018年、社主と編集の方向で意見相違があり、白洲氏と小池は、「目の眼」の雑誌事業からは身を引く)

<連絡先>

小池憲治

E-mail koike.kenji2013@gmail.com

〒106-0046 東京都港区元麻布3-2-20-401

TEL.080-4442-1888

“非在の鳥”の美学 “非在の言葉”の美学

神の創造と、[ニンゲン]の創造のちがいは、
不死の神は死すべき生物を創るときに、
その鳥の美しい歌声が、鳥の肉体の死と共に
終わることを以って足れりとしたが、
芸術家がもし同じ歌声を創る時は、
その歌声が鳥の死の後まで残るために、
鳥の死すべき肉体を作らずに、
見えざる不死の鳥を創ろうと考えたにちがいない。
それが音楽であり、音楽の美は形象の死に始まっている。

——三島由紀夫[アポロの杯]

何か究極の形のなかの美を思いえがくときに、
えがかれた美の完全性は、破滅に対処した完全さ、
破壊に対抗するために破壊の完全さを模したような
完全さである場合がある。
そこでは創造はほとんど形を失う。

——三島由紀夫[アポロの杯]



芸術家が創る作品は、作品の言葉は、
あらかじめ死すべき肉体を奪われた非在である。
ゆえに美は廃墟（非在）からたち現れ、廃墟に似てくる。
非在であることが、死が希望であるように、
無際限の可能性を帯びるのだ。

この白熱した、領域を奪われた”白”は、
(プロメテウスが神から盗んだ火のように)
何ににも頼らない、それ自身で存立する”自由”を、
つまり内なる夜の夜、内なる神の正午を 生き始めるのだ。
モーリス・ブランショの、中性の、白の、死の、言語論と、
三島由紀夫の非在の和歌原理主義とが、
中枢の中枢で白熱し呼応するのがこの時だ。

しかし、ブランショの西欧という悲劇は
(セザンヌも同じなのだが)
この西欧の非在の庭には、
<花>が存在しないのだ。幽霊。

だから、私は[宇宙紀の花・三島由紀夫]を書く

——小池憲治



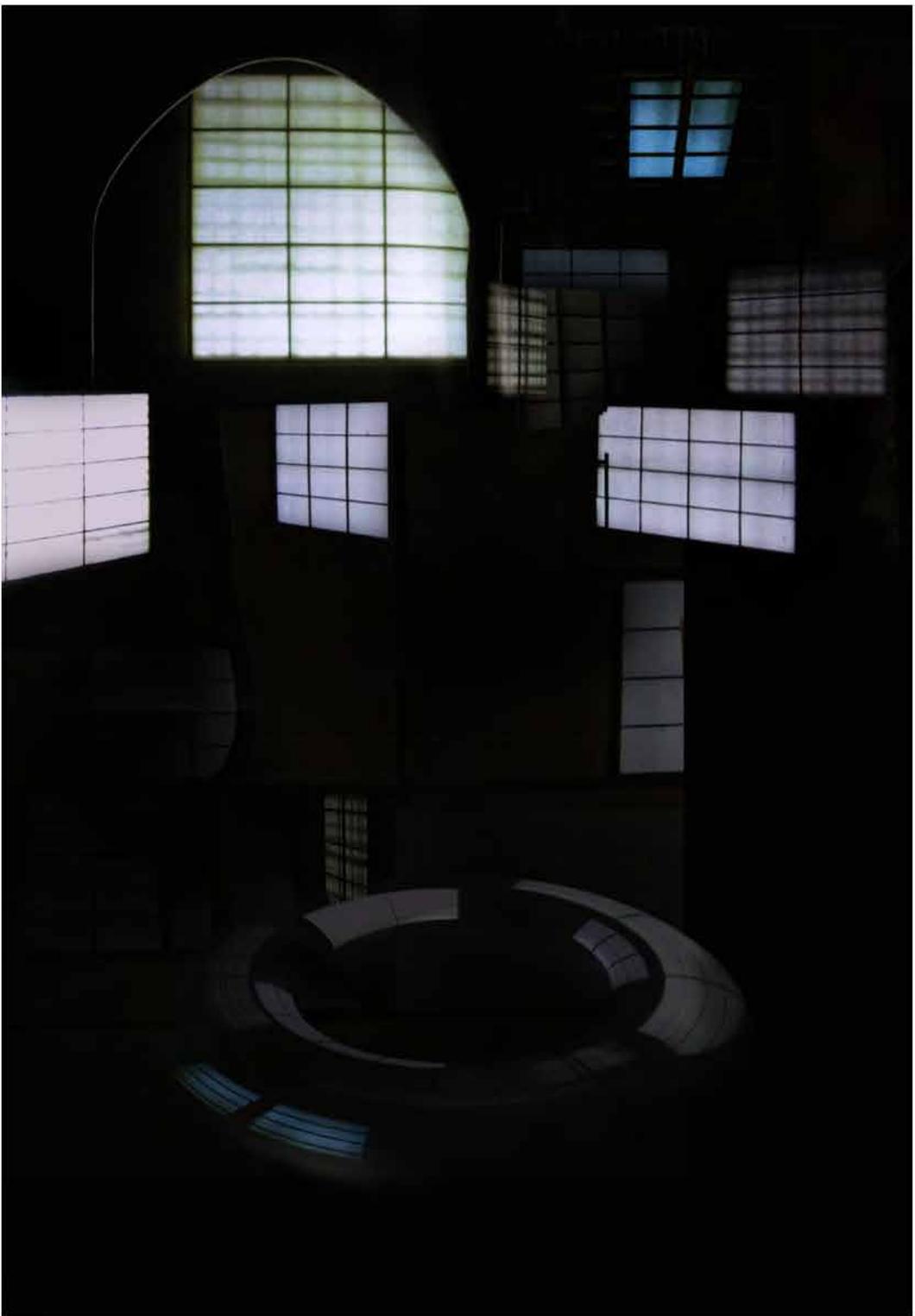
「廃墟として見れば、むしろ美しいのはアクロポリスよりも、ゼウスの宮居である。
* 私はただ廃墟の美をそこに見出す。(中略)

日本の直感の探りあてた究極の美の姿が廃墟の美に似てゐるのは不思議なことである」

——「アポロの杯」 三島由紀夫

みやびとシリウスと茶道

日本人とは、超古の地球に降下した。シリウス人が、
自らのDNAを組み込んで造った生命体であるという。
宇宙で初めての「霊性を持つ新しい種族」の夢を実現するために。
茶道は、シリウス人が意識の最高次元の霊性を持つように教え秘儀であった。



主客と茶室



茶の湯とは、
△私▽と△他者▽が、
つまり△主▽△客▽が、
絶え間なく入れ替わる仕掛けの空間である。

この仕掛けもまた、人神への進化をいぎなう、
グノーシスの仕掛けである。

—— 小池憲治



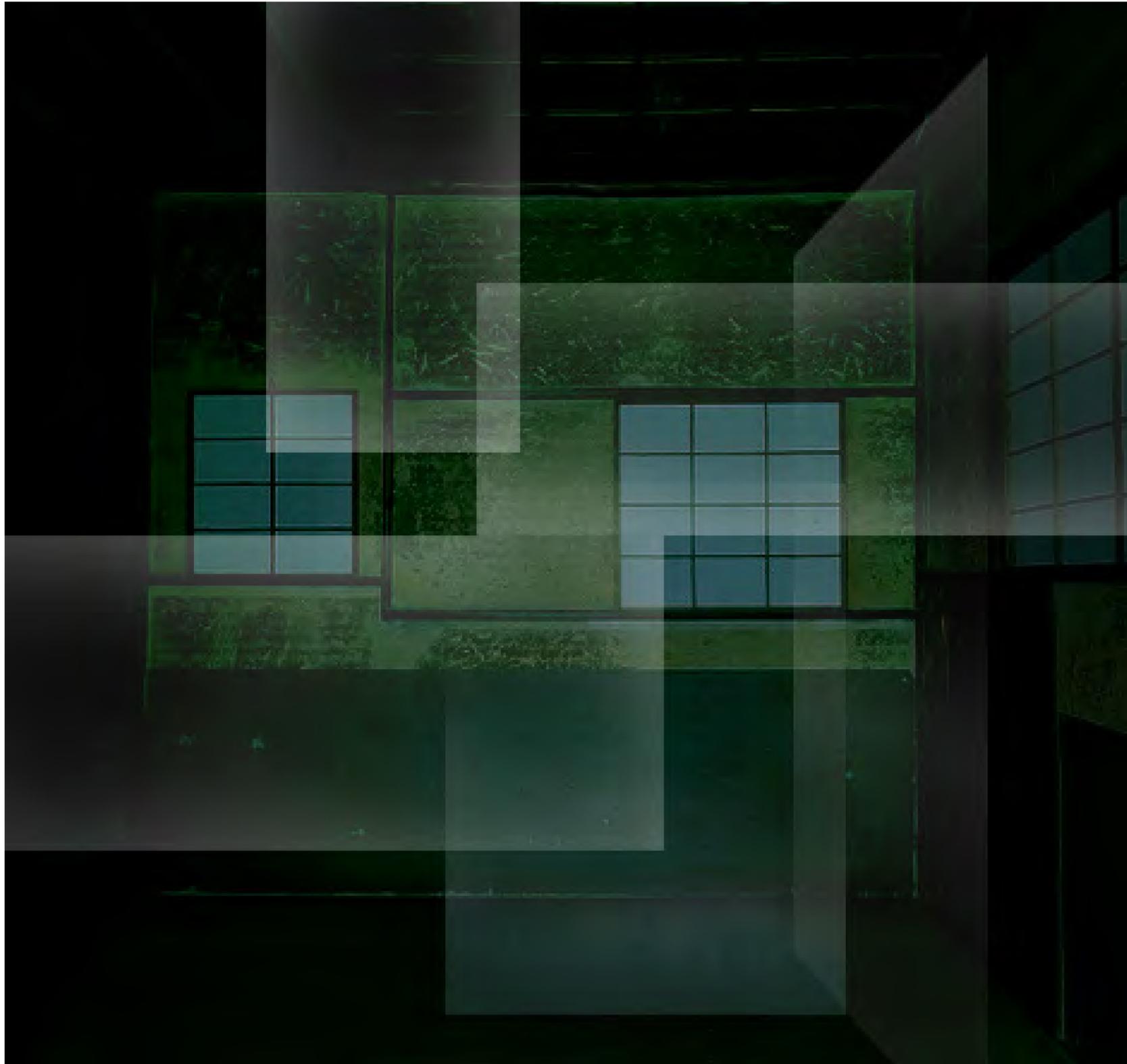
「見るものが、同時に見られるものになった」^{*[1]} 高次の花。
それは、わたしを奥で見ているものに繋がる歩廊を
持った錯合体。^{*[2]}
新しい神のニンゲンへ。
それが「八咫の鏡の合わせ鏡の秘儀」^{*[3]}、
日本だ。

*[2]: 半田広宣

「主観の元となる主体は時空にはいない。見るものである主体は奥行き=持続として収縮し、見られるものとその根底で連続的につながっている。」小林秀雄についてのweb-logの項より

*[1][3]: 三島由紀夫「文化防衛論」

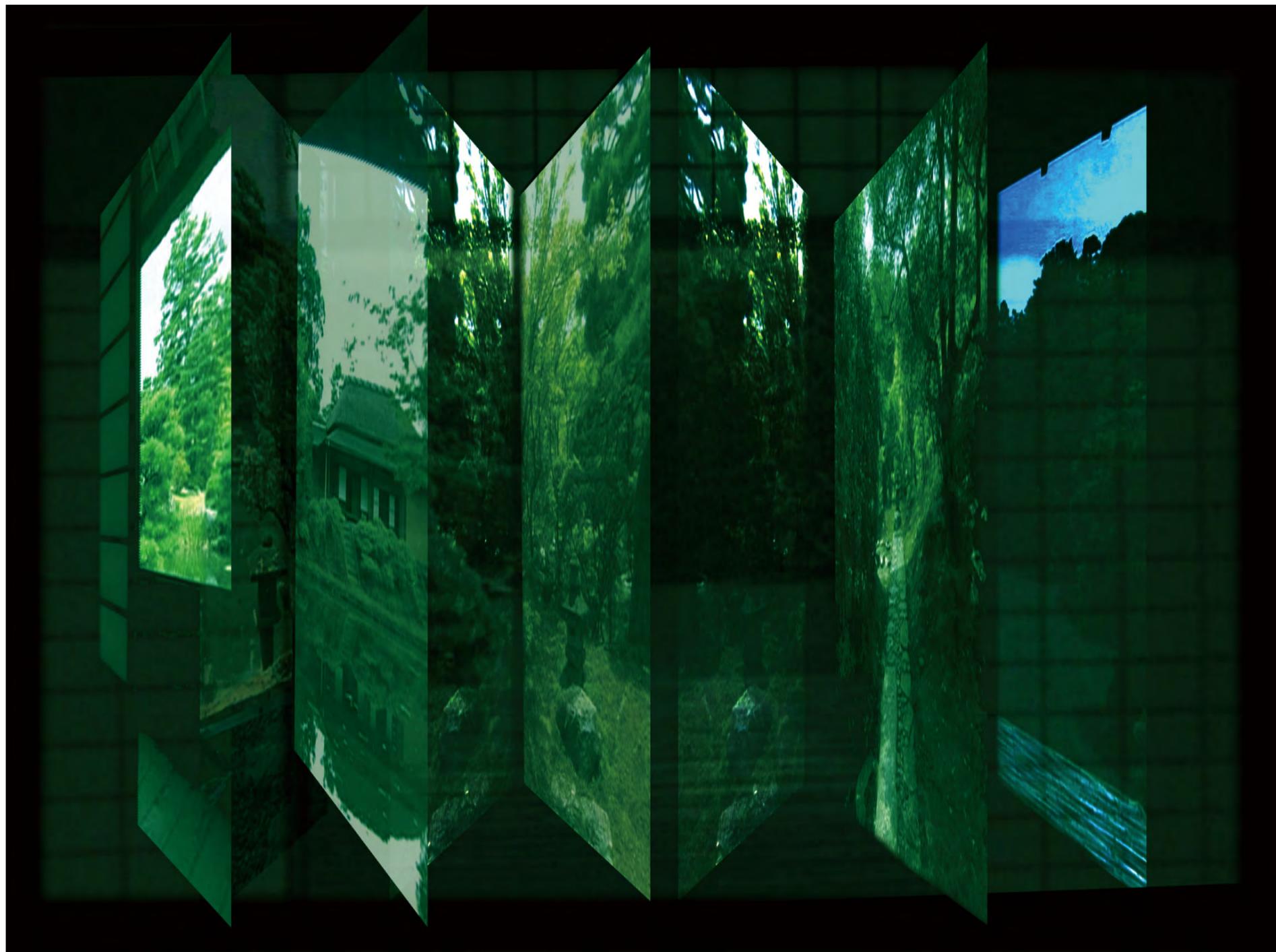
待 庵



利休の「待庵」のcompositionもまた
心ある日本人を、立体次元意識に誘っている

無数の視点

三島由紀夫



人を宇宙遠点から多視点で視る次元意識の進化を誘う
日本の回遊式庭園。 koike

「未知が既知になり、また 既知が未知になって
ほんのちよつとずらすだけで世界が一変するといふ庭園の構造……
したがって、無数の視点の移行よって、無数の世界観に接することができる庭園構造、
……それが回遊式庭園の特徴なのだ」三島由紀夫 仙祠御所序文
わたしたち日本人は 回遊式庭園によっても
多視点の人類への進化を知るように しつらえられてある。—— koike

能と鏡

お能というものはつかみどころのない、
透明な、まるいものである

—— 白洲正子

まさにそのとうりで何も無い能舞台には

白いまんまるの「霊」だけ降りている神道空間。

でもそれだけではみずからが（宇宙霊）つまらないので

自らをすこし歪ませて 「他者」をつくった。

それがシテ（じぶん \parallel 宇宙霊）とワキ（他者）の発生。

この機制は ひとつだけの宇宙霊がニンゲンやこの世をつくった理由と
まったく同じである。

わたしたちは お能によっても、主・客の起源は同じものだという
鏡像のグノーシスの型を知る。

—— 小池憲治



<不在の物語・源氏物語・世界の外へ>

存在しないものの美学…それは 自由への 宇宙紀の花。



源氏物語の登場人物は、ニンゲンの現実的細部は消され
抽象的な準位に意志的に措定されている。
まるで言葉だけの存在に。
ここにはもうかつてのニンゲンの影しか行き来しない。

ニンゲンはもういない。モノがあはれ。を持って立ち現れる世界を
千年前に、すでに架構しえた紫式部の寒気を覚える達成。

この非在・廃墟を本質とする言葉の世界では、
〈外〉に意識が浸潤し瀰漫している未来性を先取りしている。(註)

三島由紀夫は、言語の本質がこの非在にあるという美の形而上学を
幼少の頃、すでに持っていた。

三島由紀夫は、それゆえに王朝心理文学のこの非在の絢爛の意志を、
ニーチェのゾロアスターを読んだ時に強く同相と思ったのだ。

闇に抗するゾロアスターの自由。――

花は存在しなければならぬ。
空虚は荘厳されなければならない、という

プロメテウスの戦闘宣言を。―― koike

(註) __ミッシェル・フーコーや、モーリス・ブランショが〈外の思考〉を、言語論などから唱える千年以上も前の達成である。

*この論考は、高橋文二氏の「源氏物語の時空」に触発され恩恵を受けている

黄道十二宮を出よ——絶対の空無に身を投げよ

<外>へ_____ヴォリュプテ__源氏物語



「それらはほとんど
アントワヌ・ワトオの絵を
思わせるのだ。

いずれの巻も「艶なる宴」に
充ち、^{ヴォリュプテ}快楽は空中に漂って、
^{volupte}
いかなる帰結も怖れずに、
絶対の現在の中を胡蝶のように
羽搏いている。」

三島由紀夫「日本文学小史」
源氏物語の項より

三島由紀夫の源氏物語の式部への畏敬。

私はここに”優雅”とは、

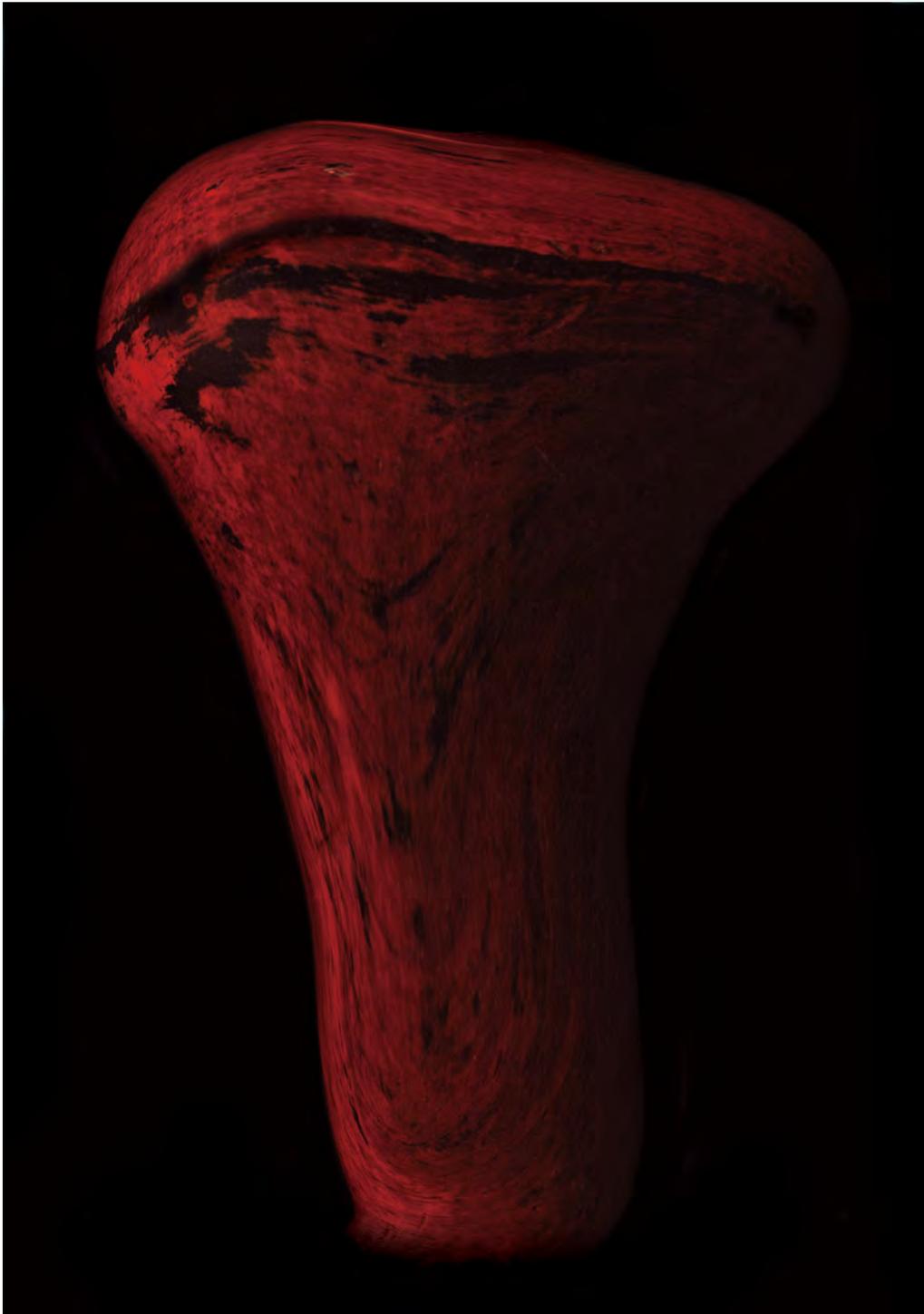
絶対の自由への”不羈”だという、三島由紀夫の”尚武のころ”を見る。

それは利休にも感じる。____koike

<アルクトウルの段階> = みやび生命体

美であることが
そのまま
めざすべききたるべき
生命体のカタチであること
それが”みやび”





花と廃墟

空虚のうつくしさがわたしを、あんな作品を
創り出すことに駆った。

空虚によって
わたしが描こうとした宇宙は、

いつか実現の母胎となるような
失われたところからのみ
出発する生な形です

学習院中等科時代の_同人誌「赤絵」 創刊号後記_平岡 公威（三島 由紀夫）

なぜ、廃墟なのか？
それは<存在しないものの美学>そのものの領域だから。
廃墟＝花
これほど完備(compact)された美はない。
なぜなら、それは
未来エチカをも示しているからだ。 小池

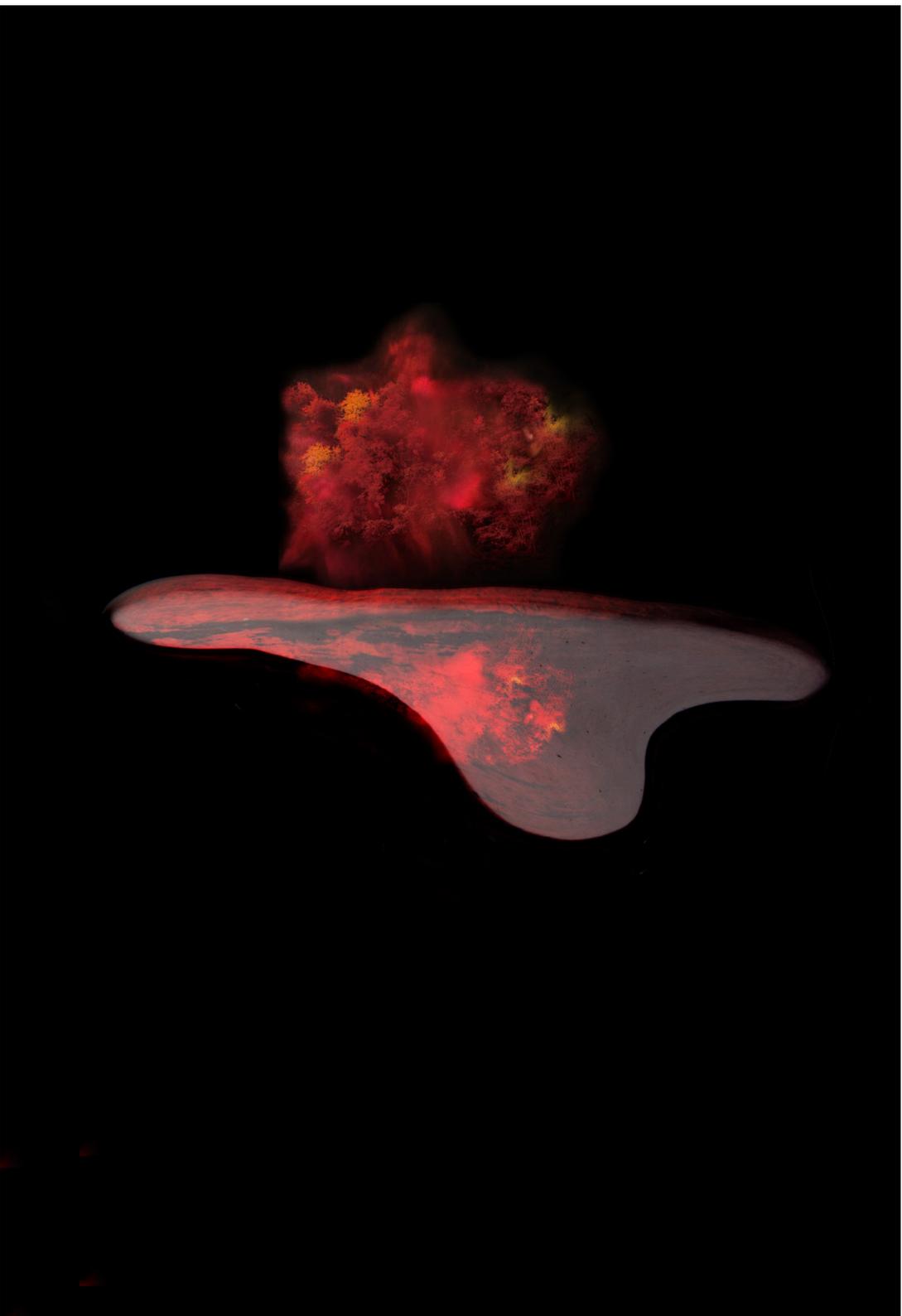
日本人はモノのまわりに視えないところを
視ることができると

日本人は、モノの中でなく
まわりにこころが瀰漫しているのを
遺伝子として知っている。

実体的な思考はすべてだめである。(唯物論的)

日本も眼にみえるものを信仰するようになってしまった。

三島由紀夫が言った、からっぽの ぬけぬえ 無機質な…つまりは…



ルドルフ・シュタイナー

1915年2月の講演『第一次世界大戦の霊的背景』より

ポスト・アトランティス時代の第六文明期における課題は、
精神を自分のなかではなく、周囲に漂うものとして認識すること
精神を元素界のなかで認識することです。

第六文明期の課題は、物質的周囲における精神認識を用意することです。
それは、精神を純粹に元素的な生命において

認識する古い先祖返りのな力が蓄えられていないと、達成困難になります。
しかし、激しい戦いが生じるでしょう。

白人は、精神をますます深く自らの存在のなかに受け取る途上にあります。

黄色人種は、精神が身体から離れていた時代、

精神が人体の外に探究された時代を保っています。

ものところろ



俵屋宗達は
〈もの〉を
やすやすと
〈心〉にしてしまう。

宗達を超えるニンゲンは
いない.....

ルドルフ・シュタイナーは、
日本人は、まわりの方こそ、意識（情緒）に
満ちていることを知っている、と言った。
小林秀雄・本居宣長・岡潔・南方熊楠・
湯川秀樹も、
みんな おんなじ。__koike

日本人は残欠のまわりに視えないところを
視ることができ
日本人は、モノの中でなく
まわりにこころが瀰漫しているのを
遺伝子として知っている。

実体的な思考はすべてだめである。(唯物論的)

日本も眼にみえるものを信仰するようになってしまった。

三島由紀夫が言った、からっぽの ぬけぬえ 無機質な…つまりは金…

東洋は、日本は、西欧近代の唯物論と正反対に

「精神を自分のなかではなく、周囲に漂うものとして認識すること」という民族だ。

これは岡潔が宇宙は八情緒Vでできている、といったことと同じだ。

ルドルフ・シュタイナー

1915年2月の講演『第一次世界大戦の霊的背景』より

ポスト・アトランティス時代の第六文明期における課題は、

精神を自分のなかではなく、周囲に漂うものとして認識すること

精神を元素界のなかで認識することです。

第六文明期の課題は、物質的周囲における精神認識を用意することです。

それは、精神を純粹に元素的な生命において

認識する古い先祖返りのな力が蓄えられていないと、達成困難になります。

しかし、激しい戦いが生じるでしょう。

白人は、精神をますます深く自らの存在のなかに受け取る途上にあります。

黄色人種は、精神が身体から離れていた時代、

精神が人体の外に探究された時代を保っています。



神に続く歩廊



王朝和歌の”内部”に、神に続く歩廊があった。
日本人は、日本語は、内部に神の残滓を持っていた
グノーシスが自然だった。

シリウス由来であろう日本語は、
中核にその構造を形而上学として遺している。
それが二つに切断された”八咫鏡の秘儀。

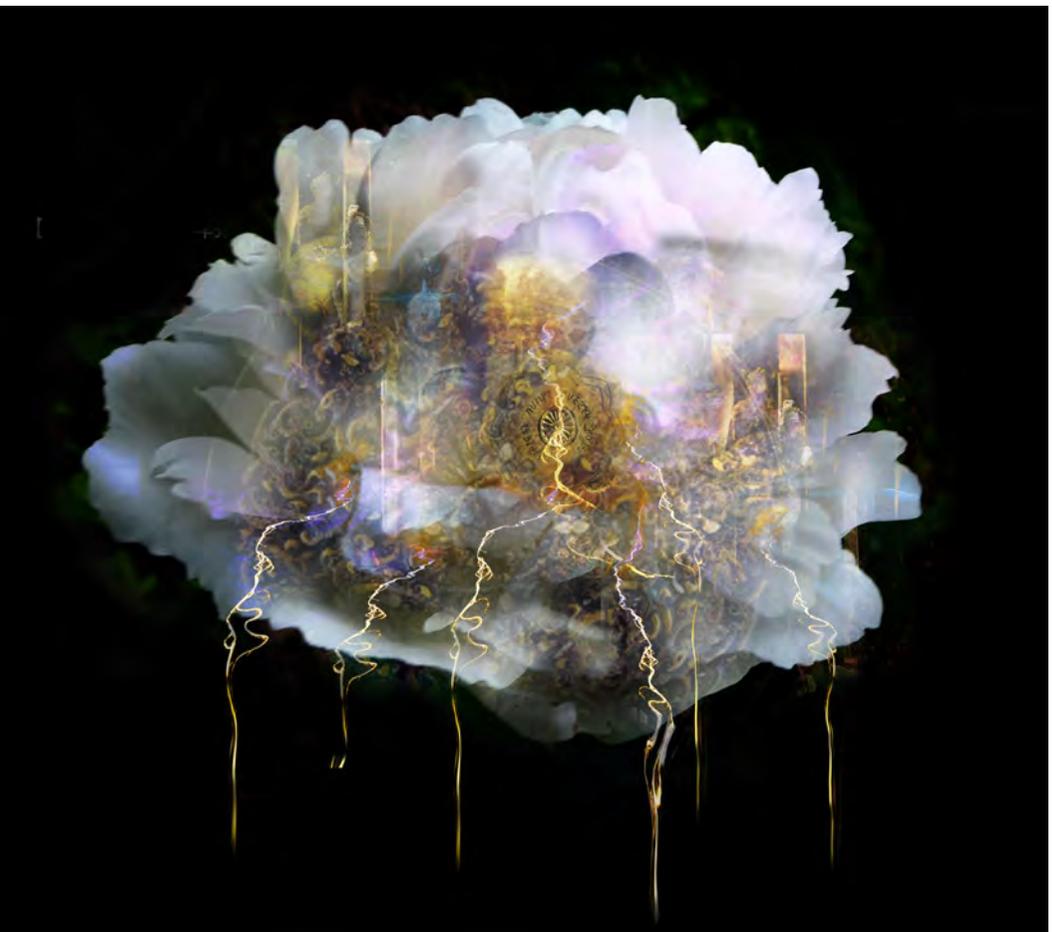
双対の鏡・鏡は合わせ鏡

*ヘブライの色濃い 伊勢・伊雑宮（イザヤの宮）の奥に
八咫鏡と伝えられている石が祀られている
その石は、剣で斬ったように、真っ二つになっている

みやびを中心にした衛星的な美的原理、
幽玄 花 わび さび などを成立せしめたが、
この独創の極こそ

天皇であつた

文化防衛論 三島由紀夫



宇宙において天皇が日本人の独創だったとは、太陽がハ花Vであり、みやびであり、ハ美V的原理であるという独創である。ニーチェが言ったように存在は美的認識によってのみ成り立つ。ヒトが向上を目指すべき神の姿形である「生命の樹」の衛星的エレメントも、中心のティファレトIIハ美VII太陽に収斂している。ハ花Vとは日本語であり、古今和歌の言葉の位相II中性 (le neutre) の、クリシェだけでできた、空っぽの、ハ公Vの規範の、その死でできた言語は、それゆえ空無（非在）であるがゆえに、無限限の無限次元の開闢を百花繚乱する。日本語だけがこのフィールドを産む可能性を保存している。なぜなら日本語のハ花Vだけが、西欧の概念と異なり、非在であると同時に、宇宙に遍満する情緒 Jocho のと同期しているからだ。この言語フィールドの湿潤の和歌のハ花Vは、それゆえ、非在の、複素・非局所として、視えない宇宙大に広がり、未来的で、新しい生命身体を目指すことができる。時間の無い、惑星意識と一体になって広がる霞の共同生命体へ。和歌は霞共同生命体として未来形。華嚴は雑華のひとりひとりの霞のアラベスク。太陽はすべて個々の日本人ひとりひとりであるように、誰もが天皇なのだ。